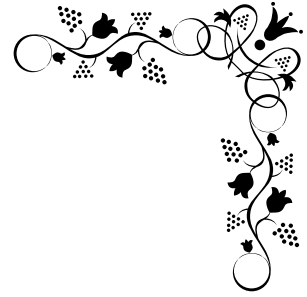
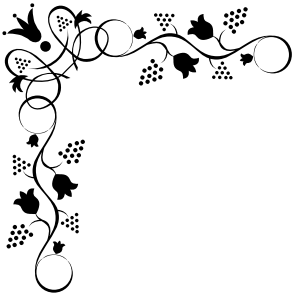


地域とつなぐ防災教育



徳島県教育委員会



はじめに

本県は過去に度々、自然災害による被害を受けています。

中でも甚大な被害をもたらす「南海地震」は、今後30年以内に60%程度の確率で発生すると予想されていることから、その対策は喫緊の課題となっています。

県教育委員会では、平成17年度から小・中・高校・特別支援学校24校を「防災教育推進モデル校」に指定し、

- (1) 児童生徒が自らの安全を守るための実践的防災対応能力の向上
(自助)
- (2) 災害時に互いに助け合うための防災ボランティア意識の向上
(共助)

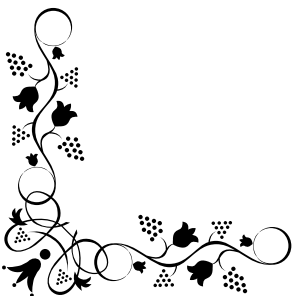
を目指して、児童生徒の発達段階や地域の特性に応じた防災教育の推進に取り組んできました。

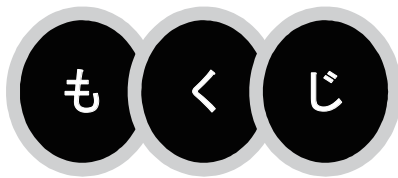
その中で地域と連携した取組みが、児童生徒のみならず、地域全体の防災力の向上に大きな効果があることを確認し、その重要性和推進の必要性を強く感じているところです。

そこで、この度、モデル校の実践の中から「地域と連携した取組み」を取り上げ、多くの学校で実践可能な形に内容を編集した冊子を作成しました。

今後、各学校において本冊子をご活用いただき、地域と連携した防災教育を推進する一助にさせていただきたいと思っております。

徳島県教育委員会体育健康課長
佐野 義行





はじめに

地域と連携した防災教育の考え方と進め方

- 1 「防災」とは 4
- 2 学校防災 5
- 3 発達段階に応じた防災教育 6
- 4 防災教育の2つの特性 7
- 5 地域と連携した防災教育の考え方 8
- 6 地域と連携した防災教育の進め方 9

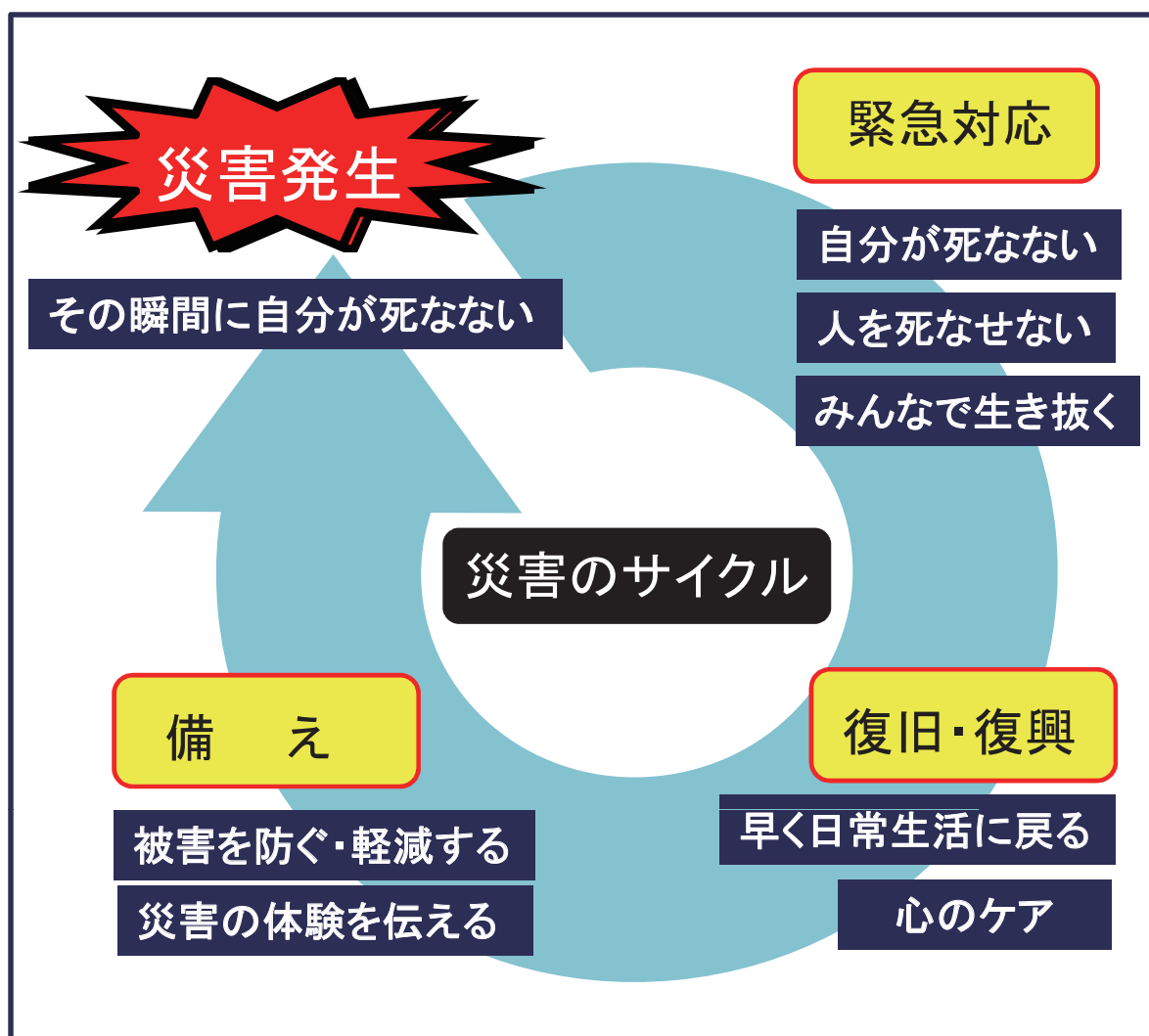
地域と連携した防災教育のプログラム例

- 1 防災頭巾の製作 12
- 2 近所で声かけ避難訓練 15
- 3 合同避難訓練・避難所体験訓練 16
- 4 家具固定・飛散防止フィルムの貼付 20
- 5 児童生徒引き渡し下校訓練 22
- 6 マイ・ハザードマップの作成 25
- 7 防災探検オリエンテーリング 28
- 8 防災(減災)運動会 30
- 9 防災参観日 33

地域と連携した防災教育の考え方と進め方



1 「防災」とは



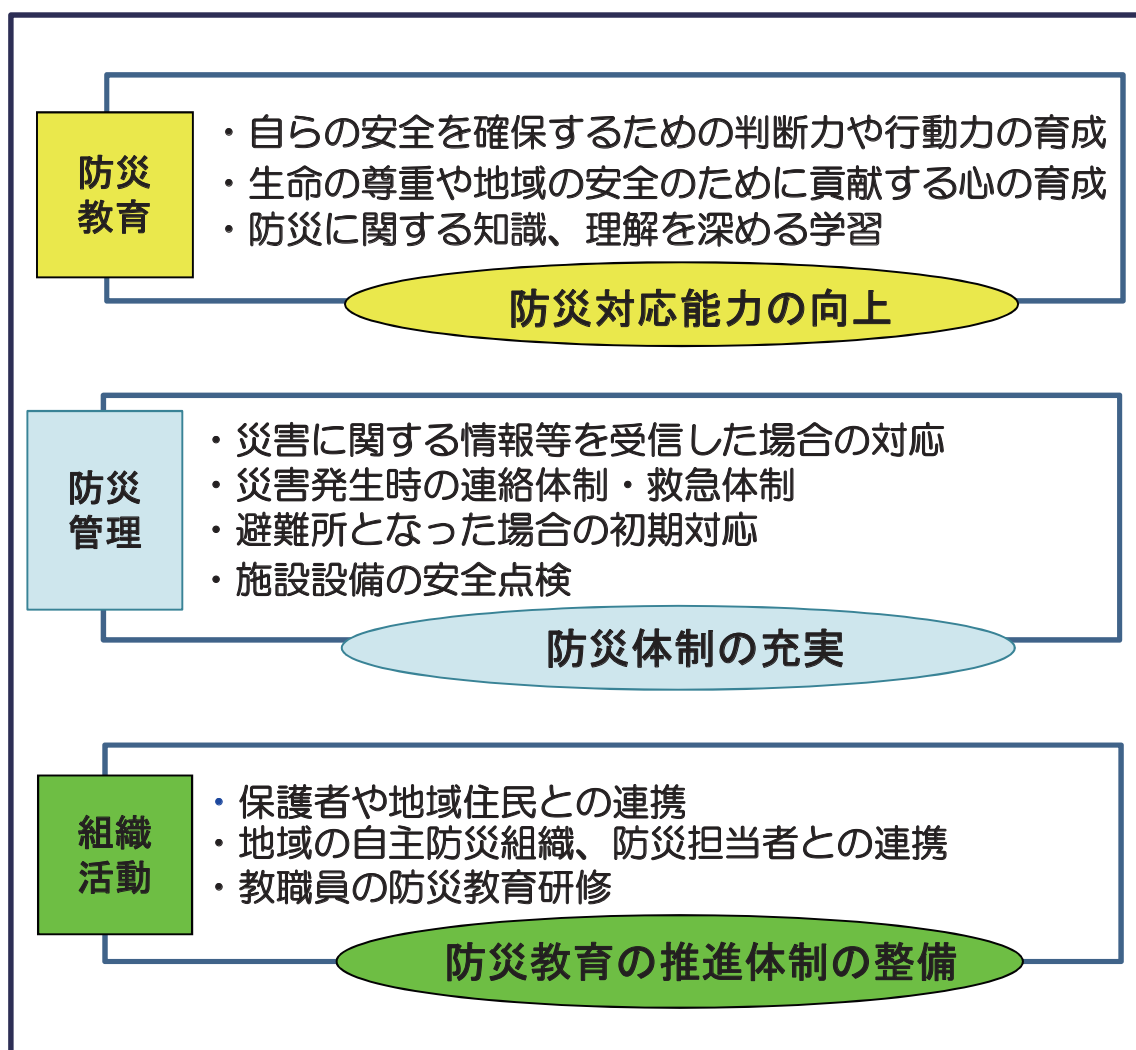
「防災」とは、「災害を未然に防止し、災害が発生した場合における被害の拡大を防ぎ、災害の復旧を図ること<災害対策基本法>」をいいます。

つまり、「備え（予防・訓練・啓発）」から、「緊急対応（応急・避難生活支援）」、そして「復旧・復興（生活再建）」まで、「災害の全ての局面」に係る用語です。

従って、防災活動は災害発生時への対応だけでなく、平時の予防や訓練、防災意識の啓発などさまざまな内容が含まれます。

目に見えやすい行事やイベントだけでなく、平時に行う家具の固定、負傷者手当のしかたなど、従来あまり目に見えにくかった活動も、「災害の総規模」を小さくする重要な内容です。

2 学校防災



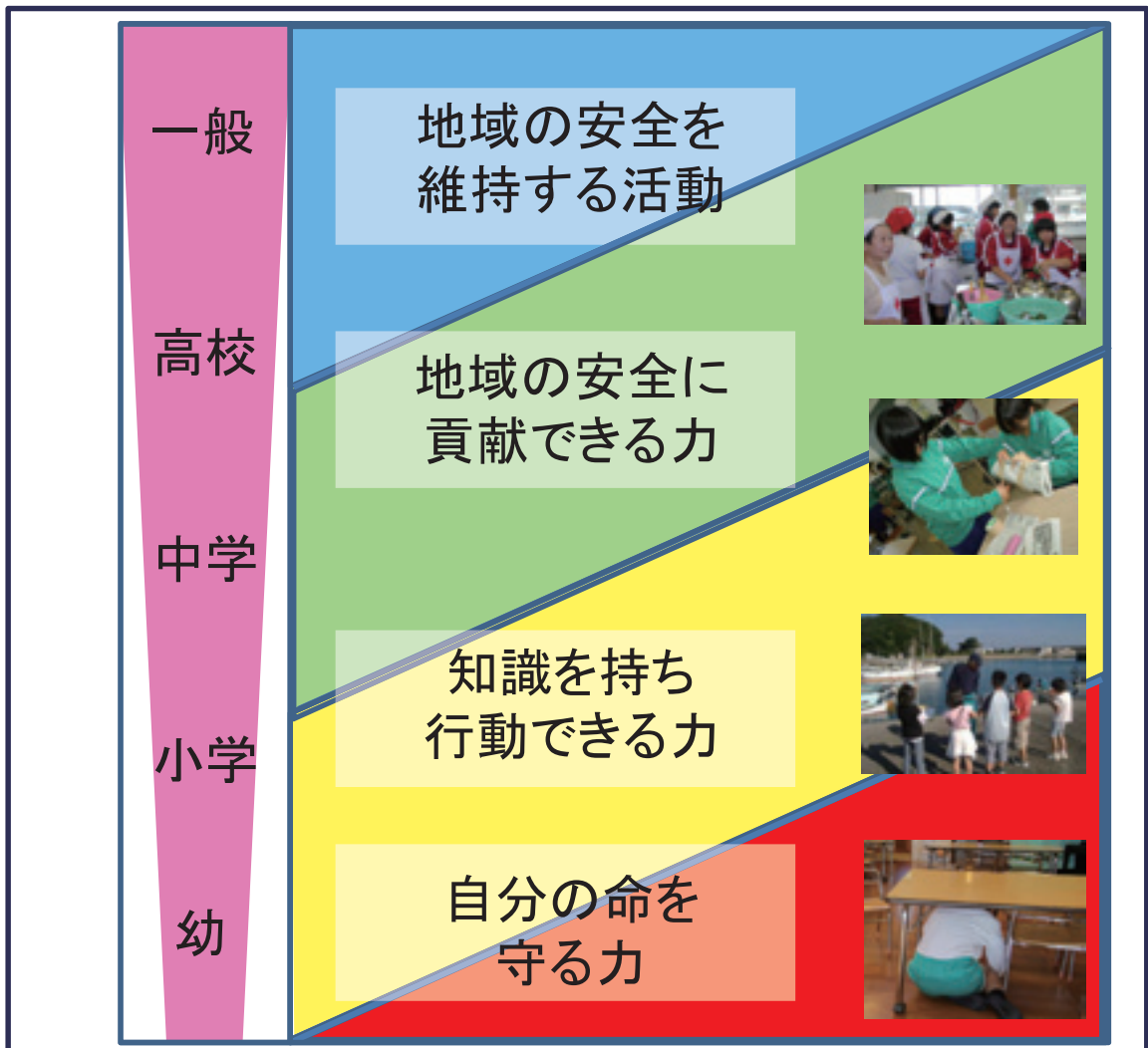
(文部科学省「生きる力をはぐくむ防災教育の展開」ほか)

学校における防災活動は、児童生徒の防災対応能力の向上をめざす「**防災教育**」、児童生徒の安全確保に向けた体制の充実をめざす「**防災管理**」、これらを推進する体制を整備する「**組織的活動**」の3つの要素があります。

これらの活動を効果的に進めていくためには、3つの要素を教育活動の中に具体的に位置づけることが大切です。

校内の協力体制を整備し、教職員の共通理解と研修を行うとともに、家庭や地域の関係機関・団体等及び学校相互の連携を図り、地域ぐるみで児童生徒を災害から守る環境を整えていく必要があります。

3 発達段階に応じた防災教育



「防災教育」は、発達段階に応じて図のように進めていきます。

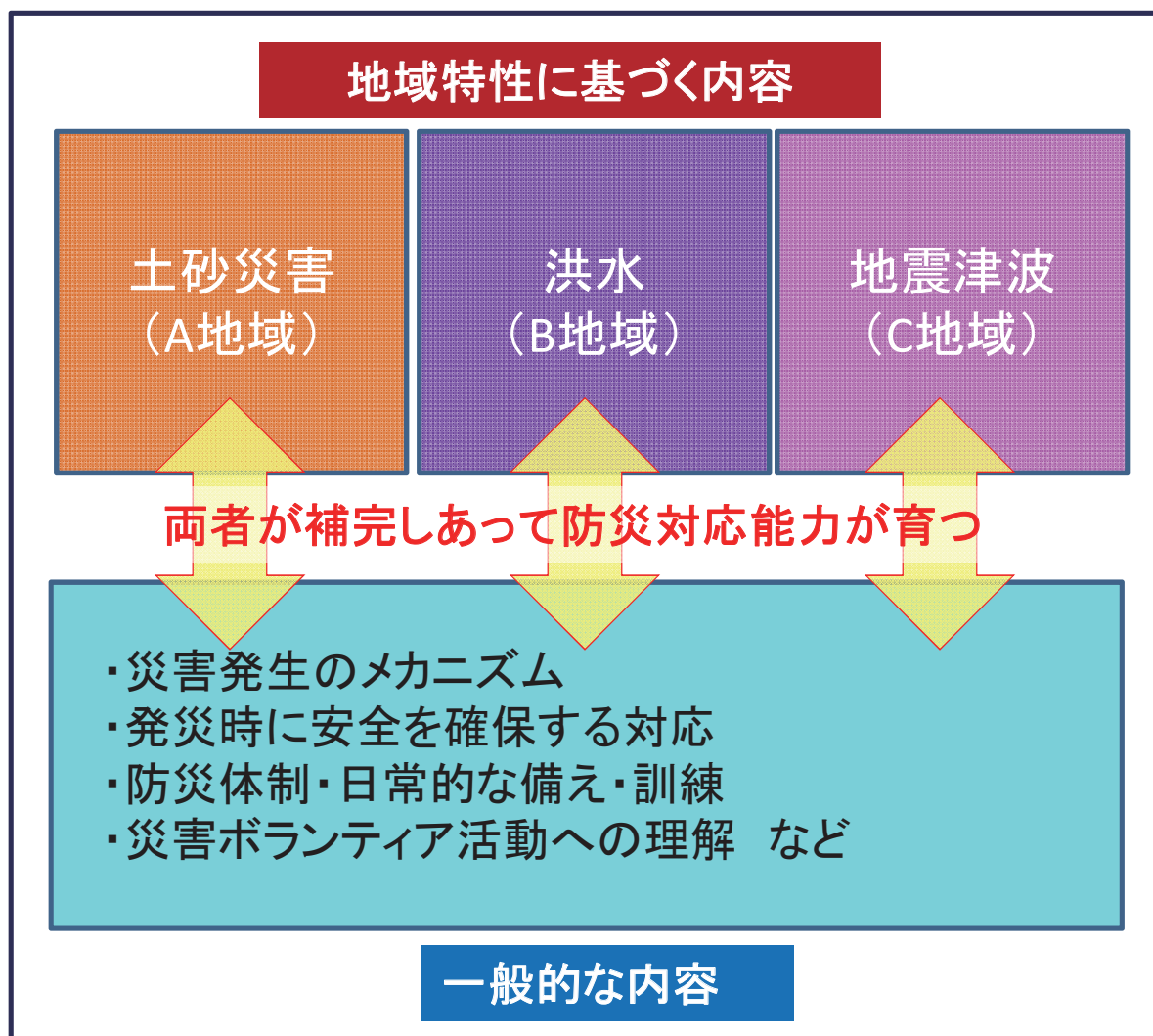
「小学校低学年」は、危険を読み取る力に未熟さがあります。従って、実際の場面の中で、具体的な題材を用いて、知識と行動の両側面から指導することが大切です。

「小学校高学年」は、大人をモデルとして観察し、価値の形成や態度の形成を行います。従って、実際の行動で望ましいモデルを示すことが大切です。

「中学生」は、行動の理由や意義に重きを置くようになります。従って、具体的な場面を用いて自分や他者の危険を予測し、どのようにすれば安全が確保できるのか、その知識と技能に目を向けさせて指導することが大切です。

「高校生」は、社会の一員としての視点を持ち自己実現を求めるようになります。従って、社会貢献という観点から活動にかかわり、社会的責任を意識する機会を多くするように指導することが大切です。

4 防災教育の2つの特性



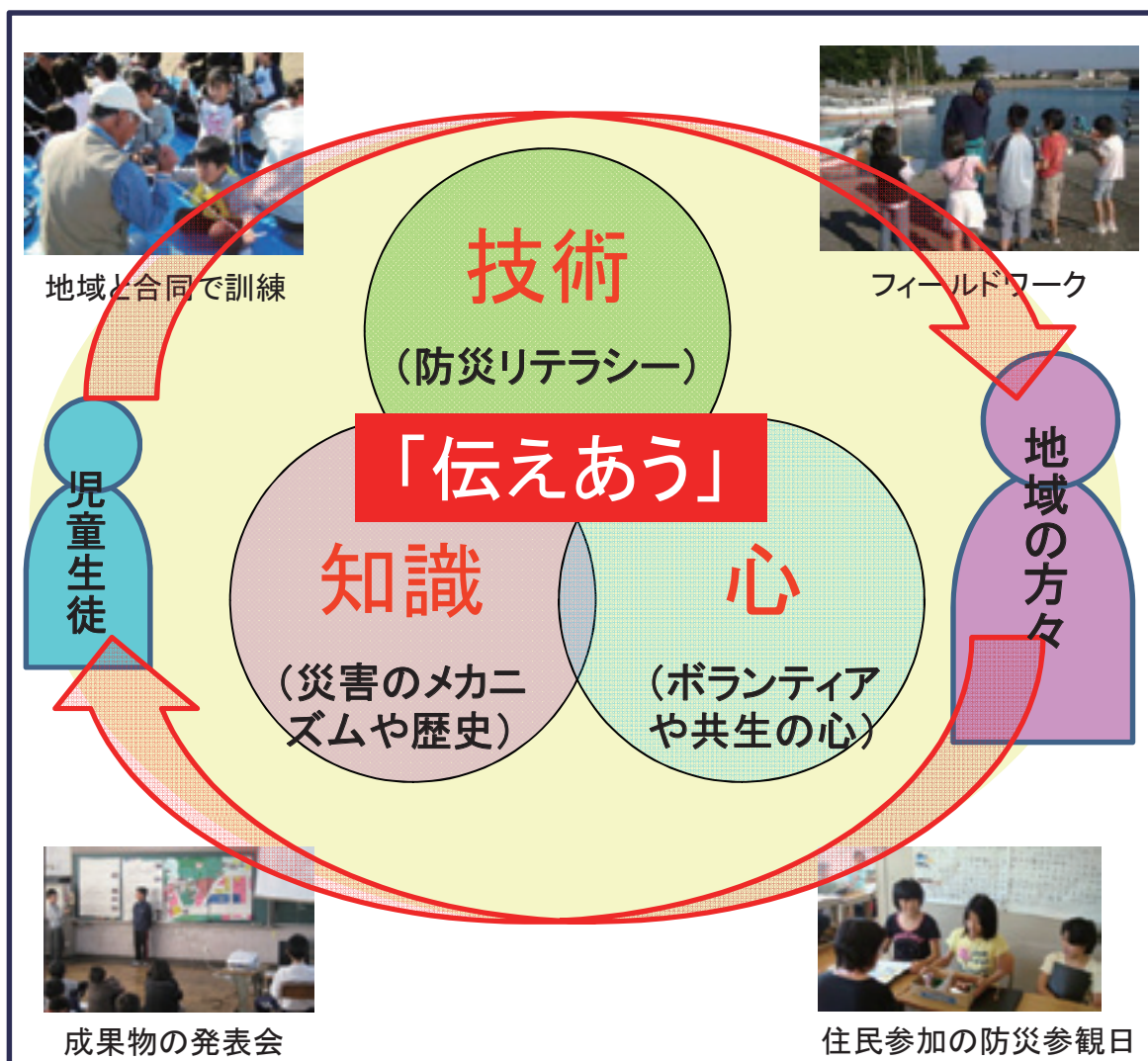
防災教育の内容には、「**一般的な内容**」と「**地域特性に基づく内容**」の2つの側面があります。

一般的な内容は、学習指導要領の中に位置づけられている「災害発生のメカニズム」や「防災への備え・訓練」などの内容で、どの地域・どの学校でも共通する内容です。

一方、地域特性に基づく内容は、土砂災害・洪水・地震・津波など、どんな災害がどのように起きる可能性が高いのかという地域・学校独自の内容です。これに関しては地域の方々の方がより多くの情報と知恵を持っています。

児童生徒の防災対応能力は、「一般的な内容」と「地域特性に基づく内容」の両者が補完しあって育ちます。防災教育を地域と連携して行うことの必要性がここにあります。

5 地域と連携した防災教育の考え方



地域と連携した防災教育を進める際には、「**伝えあう**」という体験が重要です。一方的な伝達ではなく、地域の方が児童生徒に体験や知恵を伝え、児童生徒が学んだことを地域の方に伝えるという双方向のやりとりが不可欠です。

「誰」が「何」を「どのように」伝えあうかを考えることで、「地域と合同で行う訓練」「地域のフィールドワーク」「住民参加の防災参観日」「学習発表会での成果物の発表会」などの活動のアイデアが生まれます。

「伝えあう」という体験を通して防災に関する情報や知恵が共有され、それが次の災害に対する備えにつながり、地域に安全安心のネットワークの輪が広がる。これが地域と連携した防災教育の基本的な考え方です。

6 地域と連携した防災教育の進め方



「導入」では、学習に必要なことがらの事前学習や、協力いただく地域の方との打合せなどの内容を行います。「何」を「どのように」学習するのかを明確にしましょう。

「展開」は、地域の方や保護者とともに行う実際の活動です。「なんとなく」といった単なるイベント参加で終わらせないための工夫が必要です。例えば、異なる校種や異学年の子どもと一緒に活動すると「伝え合い」が生まれやすくなります。

「まとめ」は、学びを成果物にまとめること。成果物を地域へ還元することが主な内容になります。やりっ放しではなく、学びを家庭や地域へ広げることで地域防災力の向上につなげます。

地域と連携した防災教育を実施すると、次の「3つの知」が得られます。

「人を知る」。地域にどのような人が住んでいるのか。災害発生時にどの程度の活動が可能なのかを知っておくことは被害を減らすために大切なことです。お年寄りや身体の不自由な方など「災害時要援護者」や「救援活動ができる人」についても共通理解を図ることができます。

「地域を知る」。自分が暮らす地域を知っておくことは防災活動に欠かすことのできないことがらです。活動を通して、「危険な場所」「安全な場所」「災害発生時に役立つ施設」などを把握することができます。また、災害時にはあらかじめ決めた避難経路が使えない場合もあります。複数のルートを検証し、用意しておくことができます。

「災害を知る」。自分が暮らす地域では「どんな」災害が「どのように」起きるのかを知っておくことが大切です。津波は海からよりも川から先にやって来たという記録もあります。地域の方と活動し、過去の災害事例を学ぶことでこれらの知見が得られます。

本冊子で取り上げた実践例と期待される効果は次のとおりです。

	人を知る	地域を知る	災害を知る
1 防災頭巾の製作	○	○	
2 近所で声かけ避難訓練	○	○	○
3 合同避難訓練・避難所体験訓練	○	○	○
4 家具固定・飛散防止フィルムの貼付	○	○	
5 児童生徒引き渡し下校訓練	○	○	
6 マイハザードマップの作成	○	○	○
7 防災探検オリエンテーリング	○	○	○
8 防災（減災）運動会	○	○	○
9 防災参観日	○	○	○

地域と連携した防災教育のプログラム例



例1

防災頭巾の製作(小・高学年、中学生)

活動概要

ボランティアとともに防災頭巾をつくり、高齢者や園児にプレゼントする。

準備物

材料(布、マジックテープ、カラー紐)、ミシン糸、ミシン(裁縫箱)

所要時間

50枚で3時間程度

活動手順

事前準備

- ・ボランティアの依頼、材料の確保
- ・目的の共有

防災ずきんの制作

- ・制作手順については資料参照

贈呈式

- ・高齢者や幼稚園児にプレゼントをする。

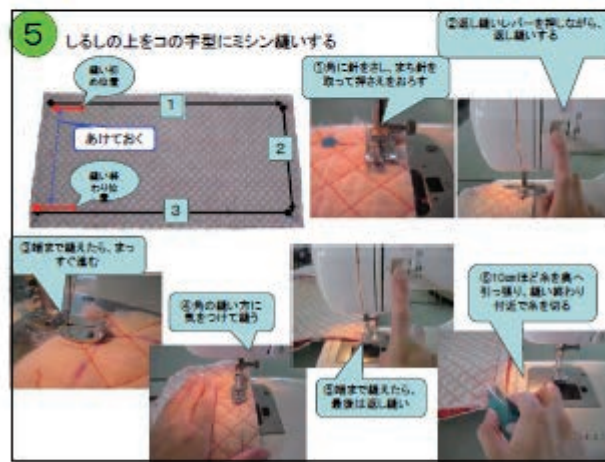
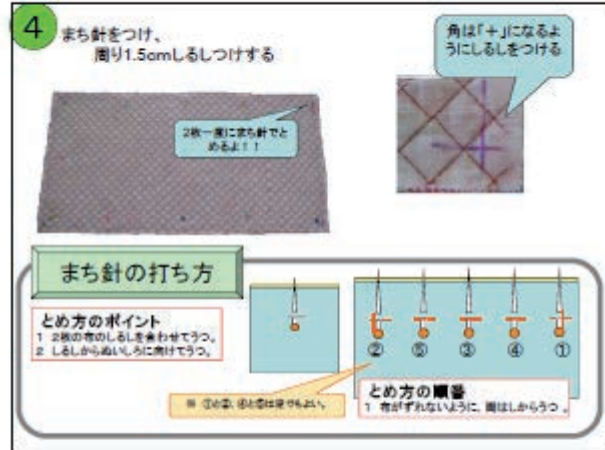
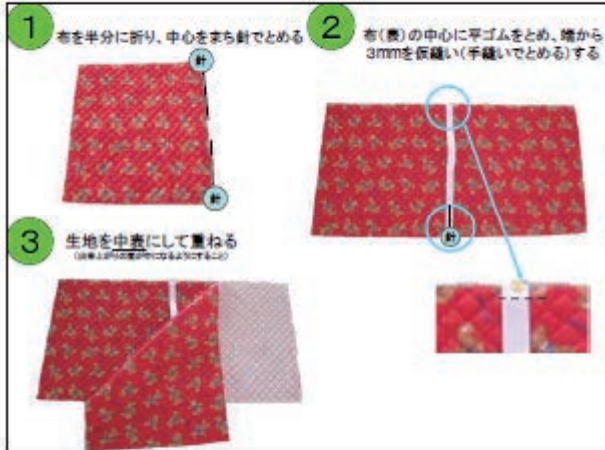
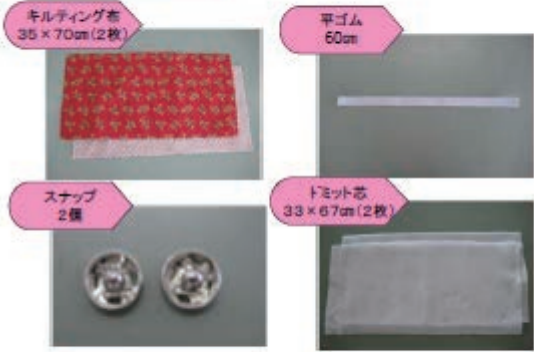
振り返り

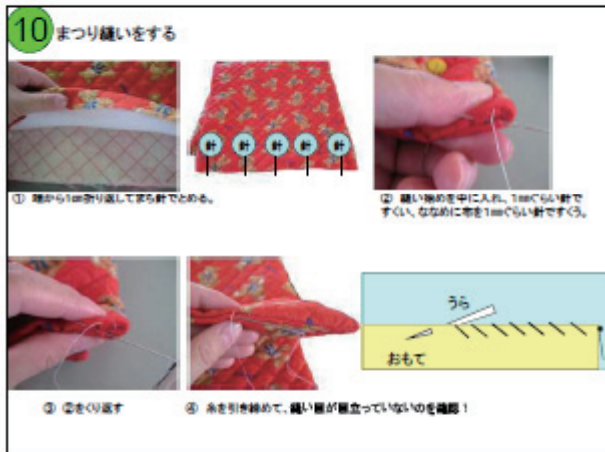
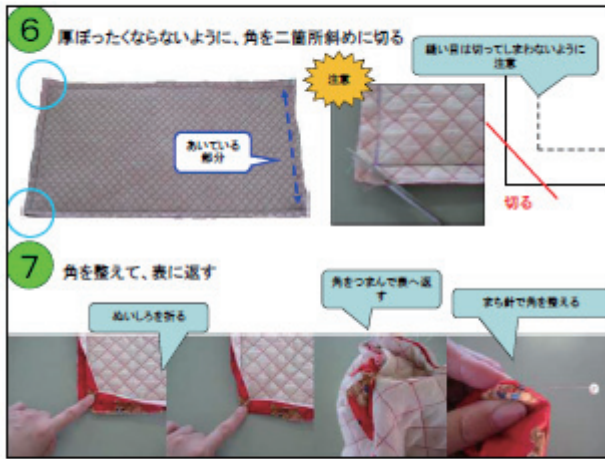
- ・ボランティアとの連携が図られたか。



防災頭巾&座布団の作り方

準備するもの





例2

近所で声かけ避難訓練（全）

活動概要

家族や近所の方とで避難所へ避難する訓練を行い、避難所までの避難経路の確認と危険箇所の確認をする。

準備物

地図、ゼッケン、筆記用具等

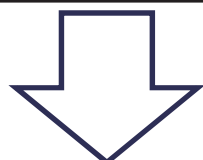
所要時間

2時間程度（実施地域の広さや避難所の数によって異なる）

活動手順

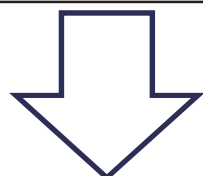
事前準備

- ・訓練実施の連絡。
- ・避難所までの経路の確認しておく。



避難所への避難

- ・家族や近所の人と一緒に避難所へ避難する。
 - ①避難所までの時間を測定する。
 - ②避難所までの危険箇所を確認する。
 - ③近所の要援助者について確認する。



意見交換

- ・地域（町内会等）ごとに意見交換をする。
 - ①名簿の確認。
 - ②避難所までの危険箇所の共有。
 - ③近所の要援助者とその対応の共有。



振り返り

- ・生活圏の避難場所が確認できたか。
- ・地域の災害に対する情報共有が図られたか。

例3

合同避難訓練・避難所体験訓練（全）

活動概要

地域の方と一緒に避難訓練を行い、発災時に起きることがらを想定して、グループで協力しながら避難をする。

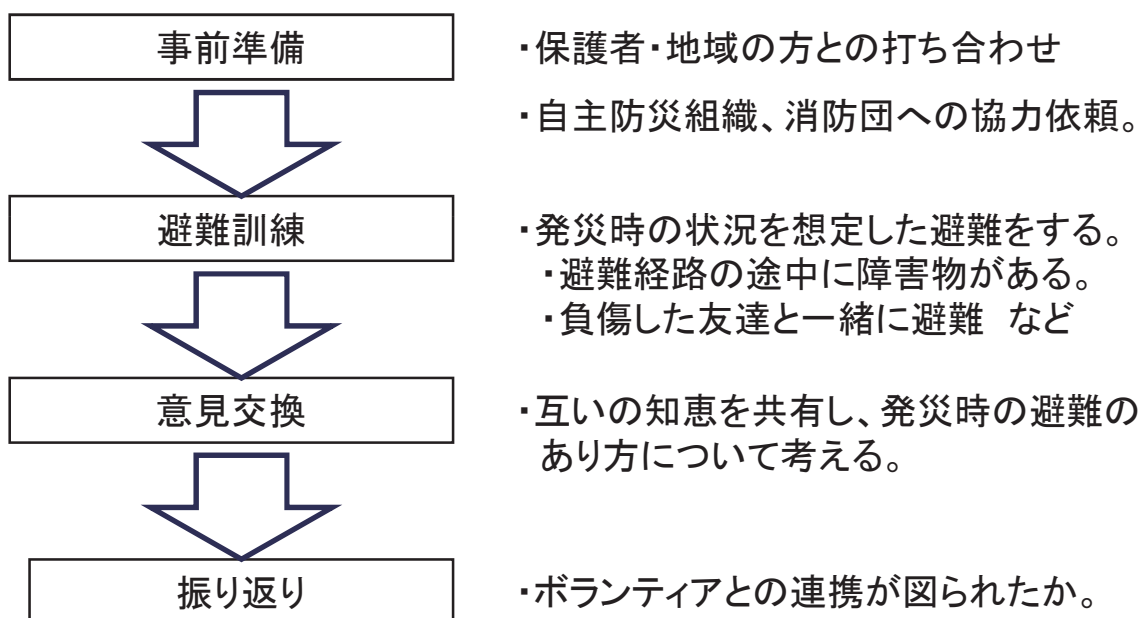
準備物

状況設定に必要な用具（ハードル、コーン、アイマスクなど）

所要時間

1時間程度

活動手順



実施事例

合同避難訓練・避難所体験訓練 (思考体験型防災訓練「こまった訓」の実施)

1. 目的 「体験」＋「考える」という要素を入れた防災訓練を行い、被災生活の「困った」を体験することで、防災意識を高める。
2. 実施団体 小学校、中学校、高等学校
3. 協力団体 徳島大学環境防災センター、徳島市社会福祉協議会、徳島新聞社
注) 思考体験型防災訓練「こまった訓」は協力団体の三者が開発した思考体験型訓練です。
4. 開催場所 高等学校
5. 参加者 小学校（児童・保護者）、中学校（生徒）、高等学校（生徒）、
地域住民 計 約70名程度
6. 日程
8：15 教職員集合・打ち合わせ
8：30 班分け掲示
8：40 出欠確認
9：00 開会式
9：05 オリエンテーション
9：20 災害映像・被災体験談
9：50 避難シミュレーションゲーム
11：00 段ボールトイレ作り
11：40 休憩
11：50 トイレ評価
12：00 昼食（避難食）
13：00 簡易タンカによる水運びゲーム
14：00 グループワーク
14：50 閉会式
7. 準備物 段ボール箱、中袖の古着、2リットルのペットボトル（空）1本
8. 留意点 小学生2名・中学生2名・高校生2名・保護者1名の計7名の
異年齢集団をその場でつくり、避難時に偶然居合わせた仲間
あり、相談しながら過ごすという設定で行う。

①困る ②楽しく・面白く ③記憶と記録に残る訓練をしよう

■避難シミュレーションゲーム

○状況設定

- ①倒壊・液状化により障害物が発生したコースを避難する。
 - ・ハードル、跳び箱、ネットなど
- ②被災によりけがを負った人と支え合って避難する。
 - ・アイマスク、片足立ちなど



※誘導する人がしっかり声で教えてあげたり、肩を貸して支えてあげたりする。

■段ボールトイレづくり

段ボールを使った簡易のトイレやトイレの囲いを作る。

- ・段ボール箱、段ボール板
- ・ビニール袋
- ・新聞紙、凝固剤など
(作り方は次頁資料参照)



■簡易担架による 水運びゲーム

竹の棒に古着を通し作った簡易担架で水運びゲームを行う。

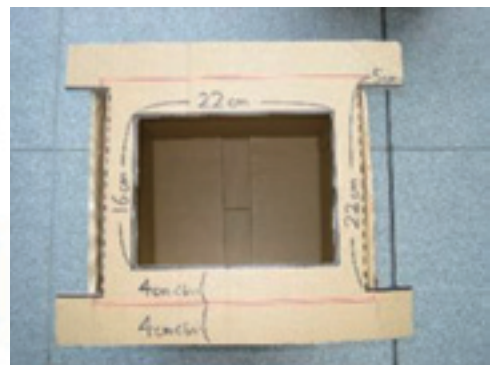
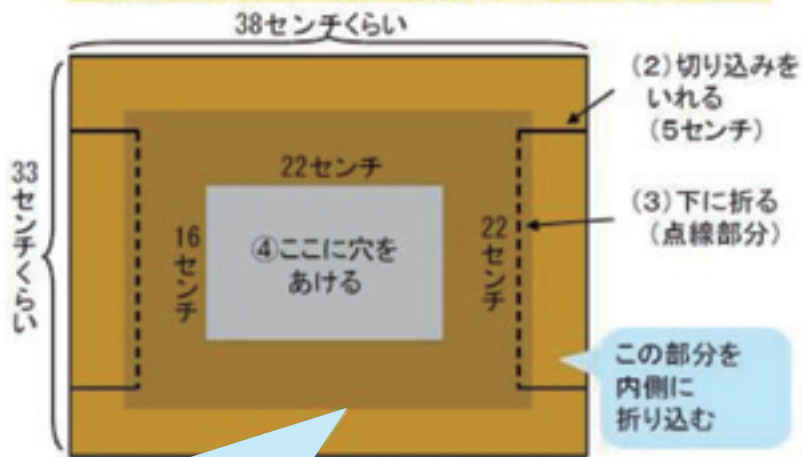
- ・竹の棒
- ・中袖の古着
- ・2リットルのペットボトルなど





① ふたを内側に折り便器を作る。

便座用の段ボール板(上からみたところ)



便器用段ボールを下に置く時の所

② 段ボール板で便座を作る(左:設計図、右:作成した便座写真)



③ ごみ袋を入れる。



④ ふたを作る。

例4

家具固定・飛散防止フィルム貼付（中学生・高校生）

活動概要

ボランティアと中・高校生が学校の家具の固定やガラスの飛散防止フィルムの貼付を行う。

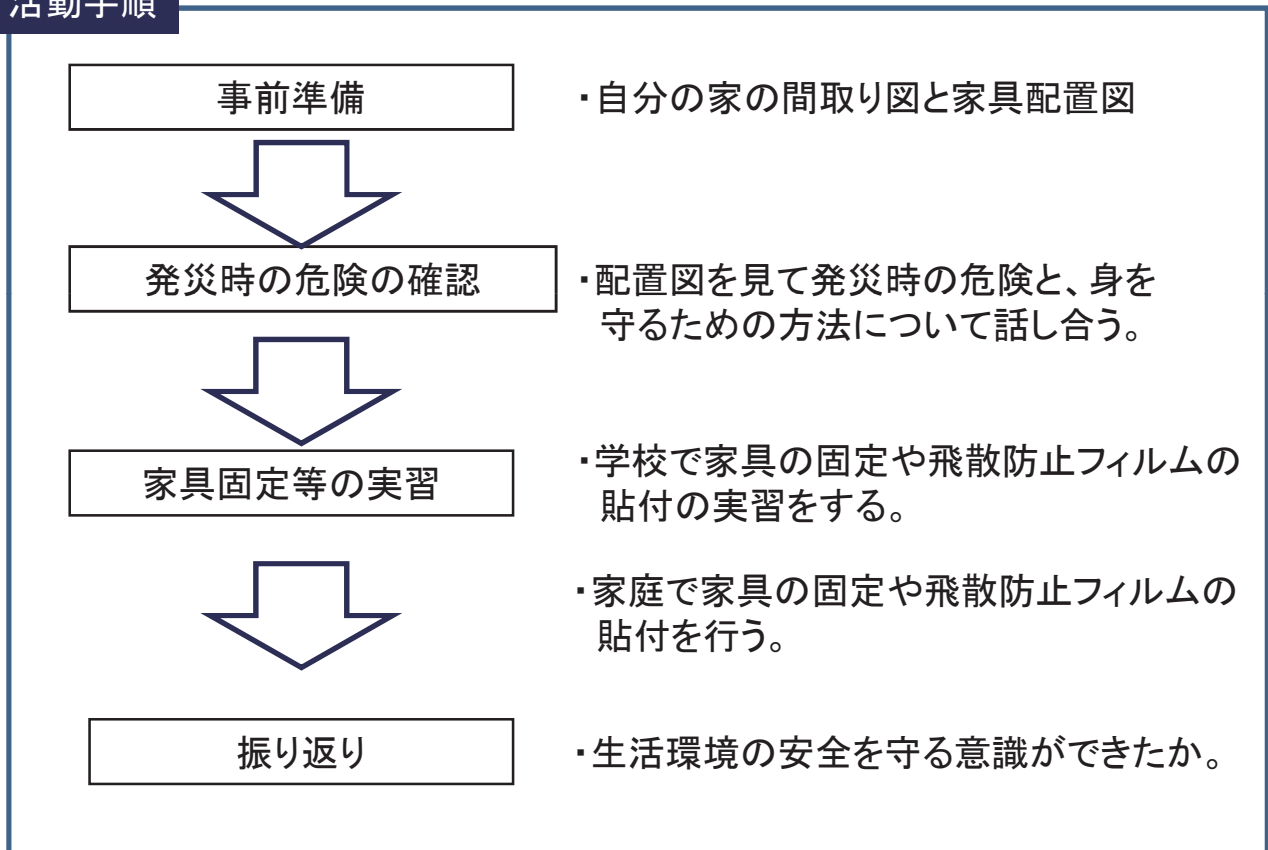
準備物

家具固定金具、ガラス飛散防止フィルム等、ドライバー、はさみ・カッターなど

所要時間

2時間程度

活動手順



※地域の独居老人宅へ出向き、ボランティア活動を行うなど取組を地域へ広げたい。

※火災報知器の取り付けなども可能。

家具固定の方法

①高さのあるオフィス家具等(高さ180cm程度)

原則、壁面に設置した状態で施工する。

<ロッカー・キャビネット等>

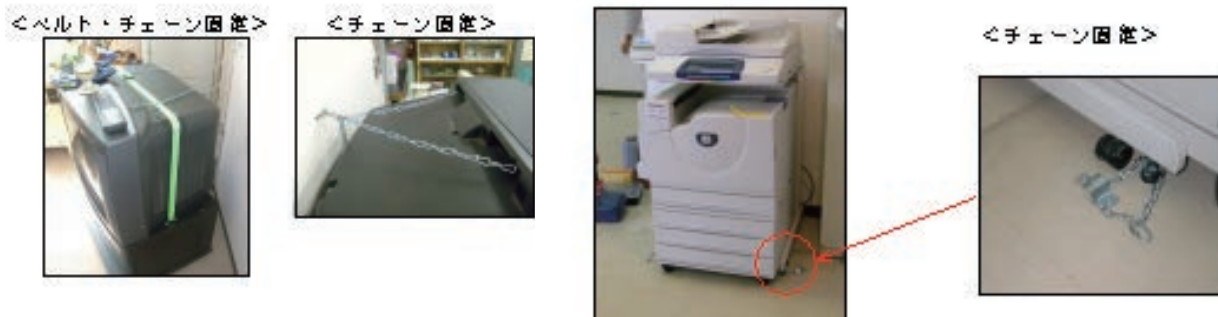
- ・L型金具により壁面及び床面に固定する。
- ・並列して設置されている場合、平金具により連結する。
- ・やむを得ず、中間に間仕切りとして設置する場合は、背面で連結し、床面も固定する。



②その他のオフィス家具等

<テレビやプリンター、コピー機>

- ・背の低い(100cm以下)カウンターや机等に設置したテレビ等は、粘着マットにより固定する。
- ・上記以外の背の高いテレビ台等の上に設置したテレビは、止め金具をテレビ台に設置し、チェーン又は針金、ベルトによりテレビ台に固定し、テレビ台は、止め金具とチェーン又は針金により床及び壁等に固定する。
- ・コピー機はキャスターのストッパー又は、付属の滑り止めの確認をする。
- ・止め金具を床又は壁に設置し、チェーン又は針金により固定する。



例5

児童生徒引き渡し下校訓練（小・中学生）

活動概要

発災時の児童生徒の安全な下校手段として、保護者への引き渡し訓練を行い、実際の発災時に組織的に機能できるようにする。

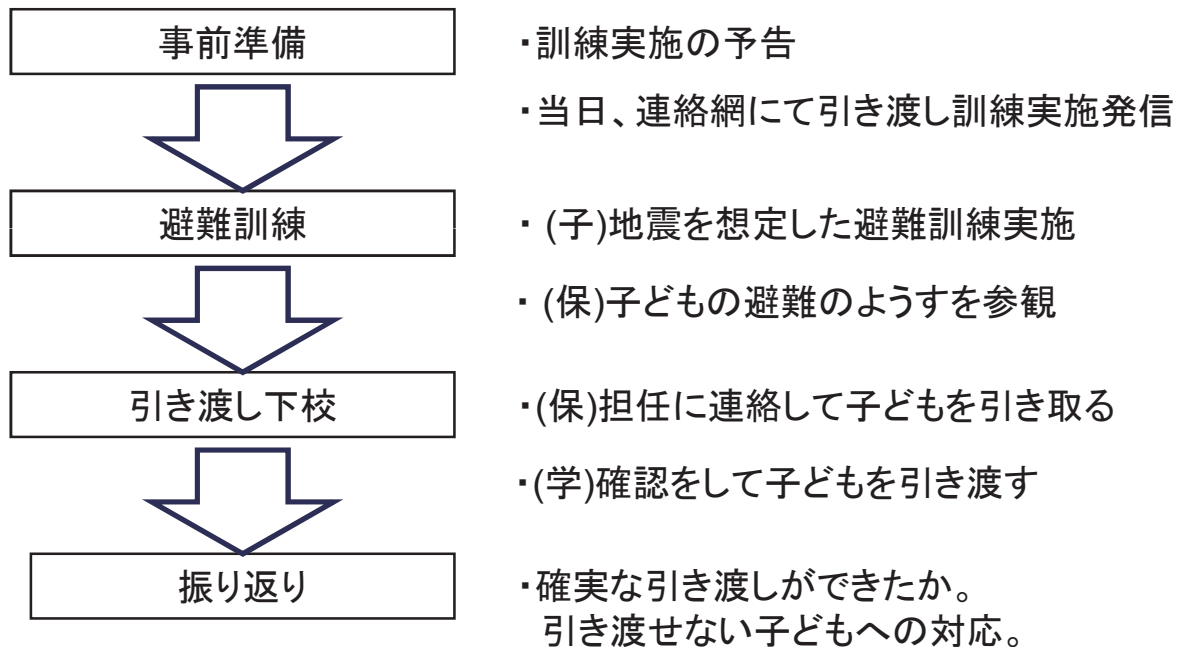
準備物

引き渡し確認表、ハンドマイク、ストップウォッチ等

所要時間

避難訓練から引き渡し終了まで45分程度

活動手順



実施案例

児童生徒の引き渡し訓練

1. 目的 災害発生時における保護者の児童生徒の引き取りが、確実かつ、円滑に行われるよう、学校・保護者・児童生徒が一体となった引き渡し訓練を行う。

2. 日時 ○月○日（○曜日） 14時30分～15時00分

3. 場所 引き取り場所・・・○○学校 各教室
(15:00以降 ○○教室)

4. 日程 10:00 連絡網で各家庭へ電話連絡開始

14:30 引き渡し開始

15:00 引き渡し終了（残留児童生徒移動）

15:30 残留児童生徒下校

(訓練時のみ。実際は引き渡すまで学校で保護)

5. 引き渡し要領

①電話連絡

「○○学校の連絡網です。本日児童生徒の引き取り訓練を実施します。○○時○○分より引き渡しを行いますので学校へお越
※連絡網の最後の方は連絡が届いたことを学校へ連絡。

②引き渡し準備

- ・児童生徒引き渡しカード
(事前に引取者、引取先、連絡方法等を記入したもの)
- ・兄弟がある場合は一番下の子の教室に集合させておく。

③引き渡し

- ・教室前の廊下に「来校順」に並ぶ。
(下履きはビニール袋に入れて持っていただく)
- ・「○○の母です。」のようにはっきりと告げていただき、確認した上で引き渡す。「引取者」として学校に登録されていない方へは引き渡さない。

④残留児童生徒

- ・15:00の時点で引き取りがまだの「残留児童生徒」は○○教室へ移動する。
- ・今回は訓練なので15:30になっても引き取りがない場合は、下校させる。学童保育の入所児童は、まとめて学童保育所に引き渡す。

6. 留意点

- ①学校の電話は災害時に「緊急連絡用」となるので、訓練中は、学校への電話による問い合わせはご遠慮いただく。
- ②自動車・自転車は混乱の原因となるので使用をご遠慮いただく。

※運動場へ避難した状態での引き渡しや雨の日の引き渡しなど状況や天候に応じた引き渡し方法について決めておく必要がある。

引渡しカード					
年 組					
現住所		〒			
緊急連絡先		自宅電話 携帯電話	自宅以外の連絡先（名称・電話）		
本校在学の兄弟等		年 組 氏名 年 組 氏名	年 組 氏名 年 組 氏名		
緊急時の引受人（学校に迎えに来る人・保護者以外の人も含む。）					
No.	引受人氏名	電話番号	本人との関係	登校に要する時間	引受確認
1					
2					
3					
4					
5					
引渡し日時		年 月 日（ ） 時 分			
引渡し場所		校庭・体育館・教室・その他（ ）			
引渡人氏名					
引渡し後の連絡先		氏 名 電話番号			
主治医の連絡先		氏 名 病院名 連絡先			
（備考）					

引渡し時に記入

例6

マイ・ハザードマップの作成(小・高学年、中学生)

活動概要

自治体が作成している「ハザードマップ」をもとに、実際に危険箇所を確認し、地図上に再現することによって、オーダーメイドのハザードマップを作成する。

準備物

自治体が作成しているハザードマップ、地域の基本図、デジタルカメラ等

所要時間

フィールドワーク2時間、マップ作成2時間程度

活動手順

事前準備

- ・自治体のハザードマップを見て、基本的な事項(災害種類、危険内容等)を確認する。

フィールドワークとマップ作成

- ・ボランティアの説明を聞きながら、地域を歩いて危険箇所を確認し、記録をする。基本図に書き込みマップを作成する。

マップ作成

- ・マップを公表し、家族や地域住民と危険箇所や対応について話し合う。

振り返り

- ・記載内容は定期的に更新する。



DIGに挑戦してみよう

【DIG】(ディグ)とは、Disaster(災害)、Imagination(想像力)、Game(ゲーム)の頭文字を取って名付けられた誰でも参加できる防災訓練。

自分たちが生活している地域の近くで災害などが発生した場合を想定して、参加者全員でその対応策のイメージトレーニングをするものです。

家庭DIG

- 自宅周辺の地図
- 透明ビニールシート
(地図にシートをかぶせれば、何回でも使える。)
- 油性ペン(色分けできるように8色くらい)
- 場所のマーク用シール
(ふせん紙でもよい。何種類かあるとよい)

わが家の防災マップづくり

①わが家の安全度確認

- 耐震対策は済んでいますか？
- 災害が起こったとき、避難通路は確保できているか？
- 家具などが転倒落下するおそれはないか？
- ガラスの飛散防止対策はできているか？
- ブロック塀は安全か？
- その他、危険はないか？



②地図への書き込み

- 家の位置を地図にマークする。
- 災害時に、家族が集まる避難場所を地図にマークする。
- 自宅や学校からの避難コースを記入する。
- 自宅周辺や避難コースにある
 - ・防災設備(消火器、防災倉庫など)、
 - ・危険な場所などを確認し記入。
- 災害時に持って行くものやすべきことを、家族みんなで話し合う。



※「DIG」は、小村隆史(防衛研究所主任研究官)、平野昌(三重県消防防災課)らによって考案された簡易型災害図上演習で「参加型地域版図上演習」と呼ばれることもある。

地域DIG

- 自宅周辺の地図
- 透明ビニールシート
(地図にシートをかぶせれば、何回でも使える。)
- 油性ペン(色分けできるように8色くらい)
- 場所のマーク用シール
(ふせん紙でもよい。何種類かあるとよい)

①被害状況の確認

- 今の状況を想定し、参加者にイメージさせる。
(例)南海地震発生 M8.0 震度6強～7
 - ・自分や家族は無事。
 - ・室内は家具などが倒れ散乱。
 - ・使える電話は携帯衆電話のみ。
 - ・電気、ガス、水道はすべてストップ。
 - ・火災の発生も予想される。
 - ・△△は家が倒壊していて通行不可。



②地図への書き込み

- 鉄道、幹線道路、河川、防災施設、被害が予想される場所などを地図に書き込む。
- 被害状況をもとに、そこから推定されることを地図に書き込みます。各自が思いついたことを、どんどん地図にメモしていく。



③話し合い(課題検討)

- 書き込まれた地図を見ながら、起こりうる被害やその対応策について全員で話し合う。
(例)近所の壊れた家の中から助けを求める声。
 - ・どんな行動をとるか？
 - ・そのために必要なものは何か？
 - ・問題点は何か？
 - ・日ごろからできることは何か？



④成果発表

- 話し合ったことを紙に書き出し、作成した地図とともにグループごとに発表を行います。
- ほかのグループが自分たちと違う発表を行ったときは、そのように行動した理由を考える。

⑤講評

- アドバイザー的立場の方に、話し合いのようすや発表の内容などについてコメントいただく。

例7

防災探検オリエンテーリング（全）

活動概要

生活圏の避難場所や防災役立つ場所をチェックポイントにしたオリエンテーリングを行い、発災時に身を守る場所を確認する。

準備物

地図、ゼッケン、筆記用具等

所要時間

2～3時間程度（実施地域の広さや避難所の数によって異なる）

活動手順

事前準備

- ・日頃の活動場所ごとに避難場所を確認しておく必要性を理解させる。

オリエンテーリングの実施

- ・ポイント（避難場所）では、休憩を兼ねて「防災クイズ」を行う。

パンフレットの作成

- ・気づいたことを発表し合い、地図に書き込んでパンフレットにして配布。

振り返り

- ・生活圏の避難場所が確認できたか。

※保護者や被災体験者と一緒に行ったり、ポイントで防災の話を伺うとより効果的。



オリエンテーリングのポイントとなる場所

1. 地域の災害に関する史跡

2. 避難施設

3. 防災に役立つ施設

- ①官公庁(消防署・警察署・病院・保健所など)
- ②地域の公共施設(公民館・集会所・学校・公園など)
- ③電話ボックス・公衆電話
- ④防災倉庫
- ⑤消火栓・防火水槽
- ⑥災害対応型自動販売機
- ⑦コンビニ、ホームセンター など

4. 災害時に危険な場所

- ①海岸・川・池などの水辺
- ②がけや急斜面
- ③ブロック塀や自動販売機
- ④狭い道路
- ⑤歩道橋
- ⑥看板 など



記念碑



津波避難タワー



災害時対応自動販売機

例8

防災(減災)運動会(全)

活動概要

運動会で防災資機材を使った競技を行い、これらの使い方に慣れる。

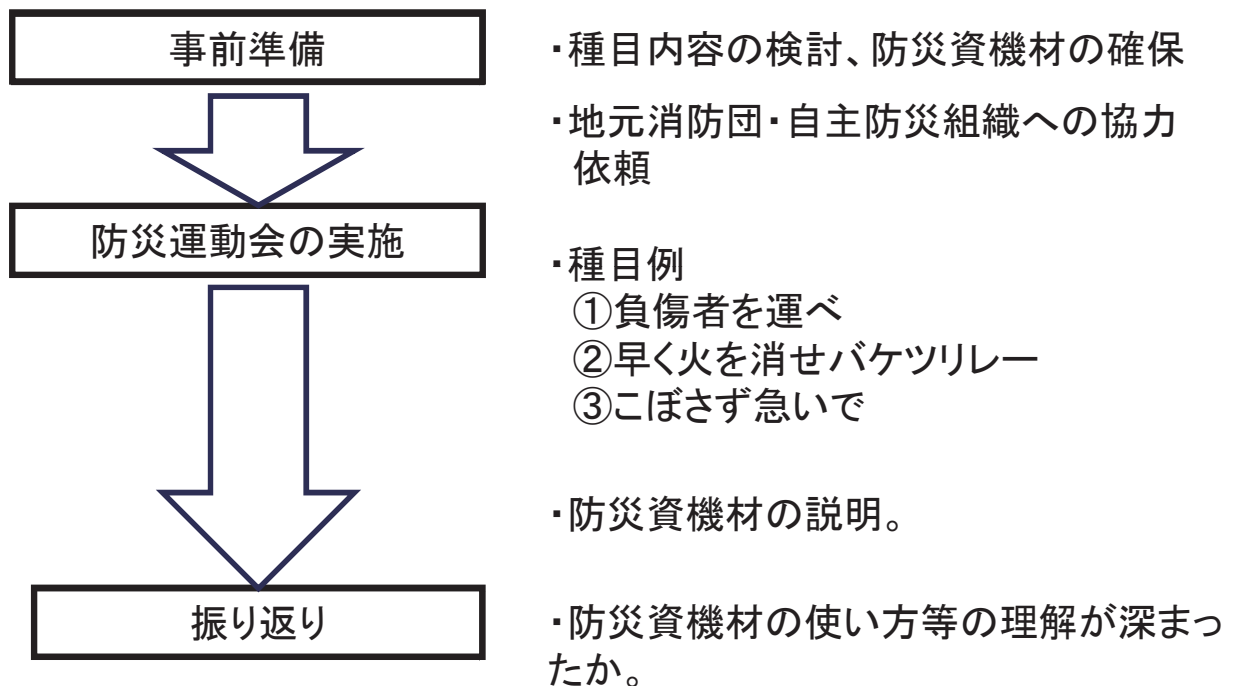
準備物

防災資機材(一輪車、砂袋、バケツ、担架など)

所要時間

1種目10～15分程度

活動手順



※競技のあと、使用した防災資機材の説明や使い方の説明を5分程度行う。



運動会で行う競技の例

■防災〇×クイズ

準備物:「〇」と「×」エリアの表示、区切るロープ
「〇」「×」プラカード、

競技内容:

- ①災害について出題された問題に「〇」か「×」かで答え、該当の場所へ移動する。
- ②正解は残り、不正解は座席へ戻る。
- ③何問か行い、「残った数×5点」を得点とする。



■対決バケツリレー

準備物:水源、バケツ

競技内容:

- ①水が入ったバケツを運ぶ列と空になったバケツを運ぶ列に分かれる。
- ②バケツリレーで水を貯める競争をする。
- ③水の入ったバケツを運ぶ列と空になったバケツを運ぶ列を交代して2回戦を行う。

指導のポイント

- ・バケツに入れる水の量は6割程度が効果的。
- ・バケツを渡すときはかけ声をかけるとよい。



■ロープ結びリレー

準備物:ロープ(約5mのロープを5人に1本。ロープがない場合は太めの荷造り用ひもで代用する)

競技内容:

- ①スタート地点から走り、「ロープ結び位置」でロープ結びを行い、次のグループと交代する。
- ②早く結んだ方の勝ち(伸ばしてほどけたのは失格)。
- ③「本結び」「もやい結び」など走者によって結びかたを指定してもよい。

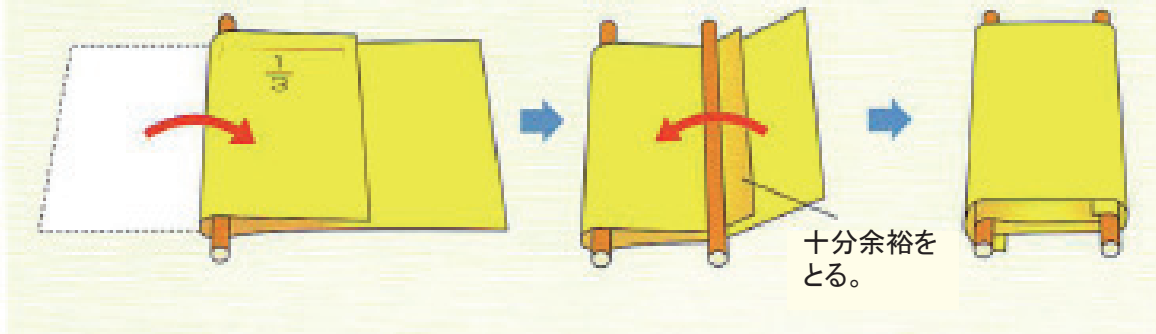
■簡易担架リレー

準備物：毛布、竹の棒、訓練用人形または水を入れた2リットルのペットボトル数本

競技内容：

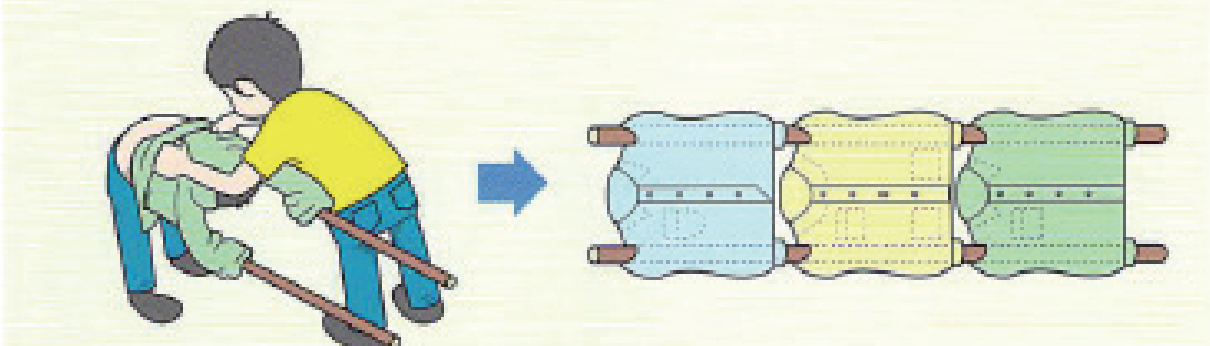
- ①毛布担架を作成する。
 - ②担架に訓練用人形(砂袋)を乗せて運ぶ。
 - ③途中でハードルなどの障害物を設けておく。
 - ④運び方が悪いグループはやり直す。
 - ・持ち上げたり、降ろしたりするときは衝撃がないようにしているか。
 - ・運ばれる人(人形)は足側から運んでいるか。
 - ・頭が少し高くなる状態を保って運んでいるか。
- ※担架に乗せる人形(ペットボトル)が軽すぎると、摩擦力が弱くすべってしまうことがある。

毛布の1/3のところを棒を置いて、毛布を折り返して作ります。



※古着を使って簡易担架をつくる方法もある。

図のように、2本の棒に上着(5着以上)を通します。



例9

防災参観日(全)

活動概要

参観日に保護者・地域の方と一緒に「防災」をテーマにした授業や活動を行う。

準備物

内容に応じて

所要時間

45～50分程度

活動手順

事前準備

- ・内容の検討、必要な物品の準備
- ・地元消防団・自主防災組織等への協力依頼と打合せ

防災参観日の実施

- ・実施例
 - ①持ち出し品は何？
 - ②〇〇で地震にあったら
 - ③緊急電話のかけ方
 - ④負傷者の応急手当
 - ⑤心肺蘇生法 など

振り返り

- ・学んだことを家庭や地域での活動につなげる。

防災参観日に行う学習・活動の例

■持ち出し品は何？

- ◆準備物：非常持ち出し品（ネームプレートつき）12種類
懐中電灯・携帯ラジオ・非常食・ヘルメット・衣類・マッチやローソク
水・救急セット・ティッシュペーパー（ウェットティッシュ）・軍手など
- ◆学習・活動内容：
 - ①並べられた非常持ち出し品の名前を1分間で覚える。
 - ②一つずつ提示し、名前を答える。
 - ③正解の数を競う（チーム対抗だと盛り上がる）。
 - ④持ち出し品の必要性や使用法を確認する。
 - ⑤これ以外の持ち出し品について、保護者と一緒に考える。
- ◆評価：
 - ①持ち出し品として、「かさばらない」「保存可能」なものの重要性が理解できたか。
 - ②家族構成や状況によって、必要な持ち出し品が異なることを理解できたか。
 - ③家庭で非常持ち出し袋を備える活動に繋がられたか。

■〇〇で地震にあったら？

- ◆準備物：筆記用具・付箋・模造紙
- ◆学習・活動内容：
 - ①指定された場所にいるときに地震があった場合、どのような行動をとるべきかを付箋に書き出す。
・「家庭」「戸外」「海岸近く」「崖の下」「川や沢で突然の大雨」など
 - ②グループで行動を話し合い、模造紙にまとめる。
 - ③結果を発表し、他のグループや保護者・地域の方の結果を聞く。
 - ④他のグループや保護者・地域の方と一緒に考える。
- ◆評価：
 - ①状況に応じた行動の仕方が理解できたか。
 - ②保護者や地域の方の体験談を聞き、イメージを膨らませられたか。
 - ③家庭で非常時の対応を話し合う活動に繋がられたか。

■「クロスロード」

◆準備物：問題文、「YES」「NO」の札

◆学習・活動内容：

- ①進行役が問題を読み上げる。
- ②全員が自分の意見を決める。(設問に対し、YESかNOか)
- ③進行役の合図で一斉に「YES」か「NO」かの札を上げる。
- ④多数派だった意見に上げた人は「1ポイント」もらう。
- ⑤自分の判断やグループの結果を記録する。
- ⑥次の問題に進み繰り返す。(10問)
- ⑦正解はないので、なぜそのように考えたのかについて、グループで意見交換をし、結果を発表する。

◆評価：

- ①災害対応を自らの問題として考え、また、様々な意見や価値観を共有することができたか。
- ②災害が起こる前から考えておくことが重要であることに気づくことができたか。
- ③家庭で非常時の対応を話し合う活動に繋がられたか。

<問題例>

- ①あなたは避難所運営員。避難所に300人の方が避難しています。そこに100個のおにぎりが配給されました。このおにぎりを配りますか。
- ②あなたは避難所運営員。避難所業務に絶対必要な書類が倒壊寸前の建物の中に。立ち入り禁止の建物に取りに行きますか。
- ③あなたは消防隊員。1カ所の消火を終え、命令により次の消火場所へ移動しようとしたら、「あそこの火を消してくれ。人が取り残されている。」との依頼が。この依頼を受けますか。

※「クロスロード」は、矢守克也（京都大学防災研究所助教授）氏、吉川肇子（慶應義塾大学商学部助教授）氏、網代剛（ゲームデザイナー）氏が開発した防災啓発ゲームです。

「クロスロード」とは、「重大な分かれ道」、「人生の岐路」のことであり、災害発生時に迫られた難しい状況にどう判断するかを通して、災害時の判断能力、対応能力をつけるものです。

■「HUG」(ハグ) H:避難所(hinanzyo)、U:運営(unei)、G:ゲーム(game)

◆準備物:避難者の事情を書いたカード250枚、付箋、筆記用具

◆グループ:1チーム4名程度(読み上げ係を除く)

◆学習・活動内容:

- ①カード読み上げ係を決める。
- ②スペースに、「体育館」、「敷地図」、「間取図」、「教室」用紙を置く。
- ③カード読み上げ係がゲームの設定条件を説明する。
(震度、気象条件、季節、時間、被災状況、避難者の様子)
- ④カードの1番から15番までを読み上げてスペースに出す。プレイヤーは体育館にどのように配置するかを相談する。
 - ・カードは、1世帯分をまとめて読みあげ、プレイヤーに渡す。
 - ・カード1枚につき1.5m×2.0mで、面積が3平方メートルとする。これが、避難者1人あたりの必要面積。
 - ・15番までの中に、「誰ともなく受付を作ろうと言った。」というイベントカードが1枚入っている。このカードの場合は、受付の場所を決めようという意味ですから、敷地図、体育館または間取図のどこかに「受付」と記入する。
- ⑤以後、次々とカードを読み上げ、配置していく。
 - ・カードを読みあげるときは、プレイヤーが前のカードを配置し終わる前に次のカードを読みあげ、プレイヤーに余裕を与えない(実災害のときは、避難者は待ってこない)。
- ⑥カード配置後に、意見交換の時間を設ける(基本は30分程度)。
 - ・用意したメモ用紙(付箋)を全員に配付し、次の質問を記入する。
『私たちのグループでは、○○は△△だから、××しました。他のグループではどうしましたか?』
例)私たちのグループでは、盲導犬は、人と同じように扱うべきだと思ったので、家族といっしょに1年2組に入ってもらいました。他のグループでは、どうしましたか?
・記入したメモ用紙(付箋)から1つ選んで発表し、その質問に対して他のグループから意見を求める。この質問を何回か繰り返して、他のグループとの比較検討を行う。

101 世帯番号【11】
北田宮21462 【北田宮8班】

やまだ
山田さん

【男50歳】全壊

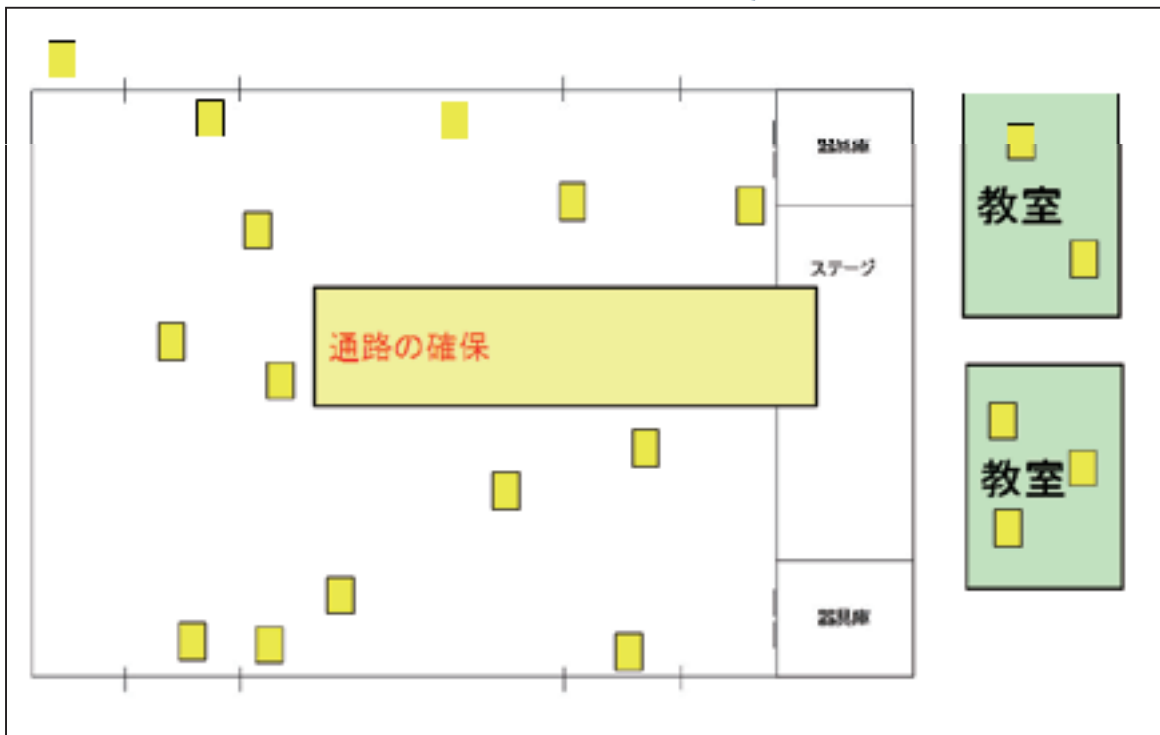
父、世帯主、妻

世帯主の父は心臓病あり。
妻はうつ病。

カード

避難者の年齢、性別、国籍やそれぞれが抱える事情が記入されている。

- 避難所に見立てた平面図に適切に配置する。
- 避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験する。



※避難所「HUG」は、静岡県が開発した防災ゲームです。避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームです。「HUG」は英語で「抱きしめる」という意味でもあります。避難者を優しく受け入れる避難所のイメージと重ね合わせて名付けられています。

徳島県立防災センター

〒771-0204
徳島県板野郡北島町鯛浜字大西165
TEL 088-683-2000
FAX 088-683-2002
E-Mail : bousaice@mail.pref.tokushima.lg.jp



- 開館時間：午前9時から午後5時まで
- 休館日：毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）、第1火曜日（祝日の場合は開館）、年末年始（12月28日から1月4日まで）
- 入館料：無料（どなたでもご利用いただけます。）
- 各体験コーナーをツアー方式でご案内しています（所要時間約1時間30分）。
ツアー開始時刻などはお問い合わせください。
 - ・10名様以上の団体でのご利用は、原則として事前にご予約ください。
 - ・見学コースの設定や、時間配分などもご相談ください。



地震体験



風雨体験



煙体験



消火体験



VR避難体験



非常持ち出し品展示

徳島県立南部防災館

〒775-0101

徳島県海部郡海陽町浅川字西福良43

TEL 0884-73-2211

FAX 0884-73-4575

E-Mail sdpp@town.kaiyo.lg.jp



- 開館時間: 午前9時から午後5時まで
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、第1火曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12月28日から1月4日まで)
- 入館料: 無料(どなたでもご利用いただけます。)
- 体験コーナー、展示コーナーなど。

防災教育推進モデル校（校名は指定当時）

平成21年度（3校）

小松島市坂野中学校
小松島市坂野小学校
小松島市和田島小学校

平成20年度（3校）

牟岐町立牟岐中学校
牟岐町立牟岐小学校
牟岐町立河内小学校

平成19年度（6校）

徳島県立城北高等学校
徳島市城西中学校
海陽町立浅川小学校

徳島県立阿南養護学校ひわさ分校
徳島市千松小学校
つるぎ町立半田小学校

平成18年度（6校）

徳島県立海部高等学校
鳴門市鳴門第一中学校
鳴門市撫養小学校

徳島県立国府養護学校
つるぎ町立半田中学校
那賀町立木頭小学校

平成17年度（6校）

徳島県立盲学校
徳島県立ひのみね養護学校
由岐町立由岐中学校

徳島県立聾学校
徳島県立海南・海部高等学校
阿南市立橘小学校



編集：徳島県教育委員会 体育健康課

〒770-8570 徳島市万代町1-1

TEL:088-621-3166 FAX:088-621-3173

E-mail: taiikukenkouka@pref.tokushima.lg.jp

発行：平成23年3月

